

# 三歳児と一年間を過ごして

鈴木直美



はじめに

この私に「先生」なんてつとまるかしらと、不安で胸をいっばいにさせて「入園」してから約一年。あいかわらず満足なこともできず、たえず、こんな「先生」でいいのかしら、と不安を抱いている私のまわりを、去年の四月には小さくて赤ちゃんみたいだった我が恋人たちが、ひとまわりもふたまわりも大きくなって走りまわっています。

三年保育の一年目、三歳児十五人のクラスをひとりで受け持ち、無我夢中というか、バタバタとあわただしい一年間が終わりつつある今、一年間をふり返って、感想やら反省やらまとめてみるどころか、なぜかとてもはずかしくて、こんなふうによくの方に読んでいただくなんて……という心境です。

「我が恋人たち」などと書かせていただいたけれど、私がかくも胸をはっていえるたった一つのこと、十五人のひとりひとりが、かわいくてかわいくて、いとしくて、離れがたい存在であること、そしてそのひとりひとりの恋人たちに、誠意をこめてけんめいに接し、彼らひとりひとりと、一つ一つの愛をはぐくんできたこと、ぐらいいです。

児童学科で四年間、「子どものこと」をいろいろな方向から、かじる程度に学んではきたものの、さして勤勉な学生でもなく、おまけに、幼稚園の先生になるなどと思っていなかったこともあって、いわゆる「保育技術」的なことはほとんど学んでいなかった私にとって、最初に書いたように、もちろん自分でやろうと思ったことながら、現実を見つめた時の不安たるや、大変なものでした。ともかくいっしょうけんめいやってみよう、私にできる精

いっぱいのことをしようと覚悟を決めて……などという大げさすぎるかもしれません、かなり悲壮な思いで幼稚園にきたと記憶しています。(そして一年、本質的に怠けものなのか、それに加えて楽道家だからなのか、悲壮な覚悟はいつのまにか日々の流れに消されてしまったようですが……)

我が園の、遊びを中心にしたいわゆる「自由保育」のおかげと、先輩などと口走るとバチがあたりそうな立派な先生方に、助けていただいたり教えていただいたおかげで、なんとか私も、無事一年やってこれたのではないかと、切実に感じています。

遊びを中心にした自由な一日……私にはもちろん、三歳のまだ集団生活にもなれない子どもたちには、まずとても楽しい幼稚園でした。四月のスタートは、ともかく幼稚園って楽しいところなんだな、もっと遊びたいな、と思える一日一日にしていこう、それも十五人のひとりひとり全部が。だから遊びまくりました。

『ままこと』、『大きな積木』、『お砂場』が人気のあるベストスリー。おかげで私は、毎朝まず、男の子に自動車を走らせるための大きな積木の高速道路を作られ、女の子にままことのおうちで、いろいろなものをおなかに入りきらないほど食べさせられ、しばらくして遊びの二つ目の山のところに、必ずと喋っていいほど、砂場で大きな山を作られたり、大きな池を掘られたり……。でもそれもやがて、ひとりふたりと小さな手を砂だらけにして手伝っ

てくれる子がでてきたり、いつのまにかなんんかで並んで同じようなおだんごを作っていたり……。

四月九日が入園式で、おかあさんと完全にみんなが離れられたのが十六日、そのころから友だち関係の芽も出はじめ、そろそろ名前が覚えられてきたようでした。『お帰り』でみんなをへやに集めてみると、誰かひとり足りず、さがして帰ってくると違う子がいない、ということもちょくちょくでしたが、ただバラバラと遊んでいる状態から、『自分の組』という意識ができて、うれしく解釈させていただければ、『鈴木先生のそばにいます』となにか楽しいことがあるし、『自分と同じような子がいる』と思えてきたのか、わりとまとまって遊べるようになってきました。

新米先生の私としては、ひとりひとり楽しそうでもいいけれど、こんなことでちゃんとクラスのまとまりができるのかしら、友だち関係ができていくのかしら、とそんなことも実はとても心配だったので。そんな私を感激させてくれるかのように、けっこうなにかを機に『飛行機ごっこ』のように、ほとんどの子がお客さまに乗って、残りの子がお見送り、盛んに手を振りあってみたり、そんなほほえましくなごやかなまとまりがでてくるような『雨の日』もあつたりしました。

四月いっぱいにはそんなようにして、思いきって遊べることを、を

中心にしました。本当によく遊べた日は、ふしぎとお帰りの時の顔がずっと晴れやかで満足気……そしてそんな日は必ず私自身も子どもたちと同じように、走りまわり、ころげまわり楽しく遊べた日。よけいなことを気にせずに、私と子どもたちがしっくりいった日であることに気がついてきました。「保育」ってまず仲良しになって、同じレベルにおいて「遊べて」、その中ではじめてなにかを教えたり、しつれたり（あまり好きな言葉ではないのですが）より良い方向へ子どもたちを向かせていくことなのではないか、ということにも気がつきました。

五月になると、暖かくて外で遊ぶことがふえ、お砂場とおすべり、それからたいい先生ひとりが逃げる（先生から離れられずに、必ず手をつないでいっしょに逃げてくれる女の子がいました）鬼ごっこが一時期流行しました。ほとんどの子が、ひとりぼっちでいることが減り、お友だちの良さを知っていると同時に、そこにいろいろな面での力関係ができてくると、けんかもでてくるし、大きな声で「いばる」子どもでてくるし、反対にいつもびくびくしている子どもでてきました。

そんな中で、ひとときわ目立ったSちゃんは入園当初からからだが大きくて（四月生まれ）わがままっぽいところがあり、なにか気にいらないとすぐ暴力に訴えようとするところがあって、表面

的には困る行動が目立っていました。五月ごろになって友だち関係ができてくると、どうしても「アニキ分」で、文句があると思う手が出るので、相手の子どもついついゴキゲンとりになります。そのうちに、「Sちゃんがこわい」と常におびえている女の子や男の子までが出てきて、一時は私も悩まされましたが、よく見ていると、落着いている時はとても良い遊び方ができているし、おうちでは手をふり上げたこともないとのこと、どうも四歳になるまで、ひとりも同年齢の友だちがいなかったため、友だちと遊ぶことが初めてで、遊び方がわからないらしいということに気がつきました。

それで、彼の気持を受け入れて、彼が困った時はいっしょに困ってあげ、ほかの子どもたちにも、Sちゃんは決して悪い子ではなく、こうしたいのだと通訳をかけてで、なるべく暴力がでずにことがすむ機会を多くし、そうすればSちゃんも気持がいいし、みんなもうれしいことに気がついていくように努めました。

一ヵ月ぐらいたつと、もうほとんど大事にはならず、むしろSちゃんの明るさ、やさしさ、たくましさ（？）などがクラスの友だちの人望を集めるほどになってきました。五月から六月にかけて、園生活にも慣れ、ベースに毎日の楽しい生活がいろいろな面でゆるやかに、より高い段階へ着実にステップを刻んでいたことが幸いしてか、私にとっては「Sちゃん、Sちゃん」が心を大き

く占めていた毎日も、ほかの人たちに悪い影響どころか、かえってSちゃんを軸に、クラス全体が私を含めてずいぶん良い経験をし、成長できたような気がします。Sちゃんに限らず、トラブルがあるということは、発展の、かなり大きなきっかけになることが、このごろ実感として感じられました。けんかは、むしろ良いことと思えるほど、けんかをしたことが双方のひとりひとりにも、ふたりの関係にも、まわりをとりかこんだ友だちにも、クラスになることが多いんだなど気づいたのです。(もちろん、どんなけんかでも、というわけではありませんが。)

今(三月)ではもうなにもいわずとも、紙をもってきてはなにか描いたり、切ったり、セロテープではったり、けっこういろいろなものを作っていますが、五月にコイのぼりを作った時などは、集めたわけではないのに、めずらしく大勢の子どもが机のまわりにすわり、ただ四角い紙にお魚らしいものを描き、それを切って竹ひごに糸でつけるペラペラのコイのぼりにすぎなかったのに、やれ描けない、切れないと泣き、「描いて」「切って」と大声でわめくみんなをなだめすかして、なんとか手伝いながらできあがったものでした。

ケツサクなコイたち……。エプロンまで切ってしまった子がいるかと思えば、絶対切るのはいや、と真四角のままだったり、小

さな赤ちゃんコイがいくつかいたり、(切りくずに眼がついているだけ)「ワンちゃんのコイのぼりつくる」なんていう子がいたり……。『絵画製作』といわれる領域も、我がクラスでは一年間こんな調子で、ついこのあいだも、時計のボンボリのついたおひなさまやら、赤ちゃんのいるおひなさまやら、ともかく楽しいものを作って見せてくれます。

六月から七月にかけて、ひとりひとりがすっかり幼稚園になじんで、はじめのころ緊張していた子どもはその緊張をとき、はしやぎすぎしていた子どもは落ち着き、本当にその子らしさがわかってきたのがもう一学期の終わり近くでした。集団としての落ち着きもそのころになってやっとまあまあ、たまにはみんなで歌をうたったり、レコードをかけて遊んだり、お話を聞いたり、紙芝居をみたり……。私自身もこのころにはだいぶ落ち着き、二ヵ月もこの子たちにあえなくなるのがとても寂しい気がした夏休み前でした。

その長い夏休みを終えた二学期、みんなグリーンと大きくなり、元気にスタート。しばらくして私が出張して留守をしたあと、みんなのうれしそうな顔などは「先生、バカ」としてはゴキゲンなできごとでした。「お店やさんごっこ」など、わりに規模の大きな「ごっこ遊び」もずいぶんできたし、むしろ私はいない方がいい

くらの、友だち同士の遊びも活発になってきました。

十月には、運動会と遠足とおいもほり。運動会では、お花の体操をしました。男の子がなかなかのつてくれず、女の子がまるくなっている、ナンダカンダ文句をつけて、そのくせ走るリズムの時はいっしょに走ったり(けっこう気は向いているらしいのですが……)。おへやではそれでもいいけれど、みんなで練習する時にまで、オフザケムードで、私としてはかなり気になりました。めずらしくお説教めいたこともあって、ドキドキして当日をむかえました。でも当日はまあまあふんい気にもまれたのかちやんとやってくれてひと安心。ついつい形になるところばかり気にしてしまうのはいけないかしら、と思いつつ……。

遠足では広い緑の上を、私も、子どもたちも走り回って、ころげまわって、とても楽しい一日でした。私自身、春の遠足よりずっと気分的に楽だったせいか、広いところでも思いきり走れたようです。

十一月の初め、少し風邪気味でのがいたかった時、いつもこんなにも動いているのかしら、いつもこんなに大きな声を出しているのかしら、と大発見のような気持でした。前者はともかく、入園当初、できればからだにふれて、Face to Faceと心がけて

いたし、またそうしないと聞いていない子どもがいたのに、今ごろになると離れたところでも聞いてくれることをいいことに、つい遠くからどなってしまふのかしら、と大いに反省。そのほかのことでも、いつのまにか怠慢になっていることがないかと、反省のよい機会でした。

十二月になって、冷たい風が吹いてきて、外の遊びが減り、おへやの中でほとんど全員が遊ぶようになると、自然に毎日毎日と同じようなくり返してマンネリ化し、グループのようなものも固定化しがちになり、何か新しいことがないかと、みんなが望んでいるようでした。

こんな時にできたのが音楽劇のレコードでした。わがクラスのリパートリーは「赤ずきんちゃん」と「狼と七匹の子やぎ」そして一番好きな「白雪姫」……。いまだに毎日のようにバックミュージックのごとく、くり返しメロディーが流れ、それに加わっている人数は日によってさまざまながら、よくも飽きずに、と思うほど楽しそうにやっています。たしか「幼児の教育」の三月号に、この音楽劇を初めてやった時の様子を書かせていただいたのですが、あの時の状況から一回、一回の上演になにかしらの発展が見られ、役割通りのけんかもなく、見事に交替しながら、気のせいかな「演技力(?)」も向上しリズムにもあって、なによりも

楽しく遊んでいます。

女の子のこのブームに圧倒された、ウルトラ警備隊員たちも、

時には、小鳥とか、王子さまとかで参加したり、観客(?)に  
ったり、おへやを占領された彼らを外に出すために、冷たい風の  
中を走り回る先生の怪物が、かえってうれしくて追いかけたり、  
組みついてきたり……。二学期の末はこのように、わりに大きな  
グループの遊びが落着いて続き、だからといってそれにこぼれた  
子どもたちも、ちゃんと満足に遊べていて、学期末の忙しさに追  
いたてられていた私には関係なく、しっくりした感じで二学期を  
終えられた気がします。

三学期は、入園選考などがあつたりして短かった上に、お休み  
が多く(風邪、水痘)こじんまりと、チョコチョコと毎日が過ぎ  
ていった感じがしています。もうすつかり友だち関係もうまくい  
き、遊べずに一人ぼつんとしている子どももいなくなり、グルー  
プごとにかなり良く遊んでいるのを、時々気をつけながら毎日数  
人ずつの子どもと、じっくりつきあえる日が続いています。小さ  
なけんかは日常茶飯事というなら、むしろ平穩無事ともいえる毎  
日で三学期を終えつつある現在ですが、「こんな毎日でいいのかし  
ら」の疑問は依然として、常にモヤモヤと胸に漂っている私の心  
境です。

#### おわりに

このようにつたなく書きつらねた一年間ですが、本当は文章に  
など書きあらわせないほどの、一日一日の、ひとりひとりの歩み  
が、私とも複雑にからみあって、私の心の中にズッシリとした重  
みとなって存在しています。もっとしつかりした、実践の記録の  
ようなものが書ければよかったのですが、以上のような表面的な  
流れの中に、ひとりの新しい幼稚園の先生と、十五人の新入園児  
たちが、お互いに成長してきたものが、きつときつと、形にはな  
っていないとも、ちゃんとあるのだ、ということ、わかっ  
ただきたい——というより、私自身が信じたいのです。

一方で、まだまだ未熟で、半人前もつとまっていけないのではな  
いかという不安や、実際に、もっとこうしたらよかった、ああで  
きたらよかった、と反省の種はつきないのですが、それはこれか  
らどんどん勉強し、身につけていきたい、という姿勢に甘えさせ  
ていただいて、ともかく精いっぱい一年間をすごし、子どもたち  
の成長を確かめ、喜び、その子どもたちといっしょに、私もまた  
成長してきたと、今、信じていたのです。この一年の重みの上  
で、四月からあらたに二十人の子どもたちを迎え、よりいっそう  
がんばっていきたいと、思っています。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)